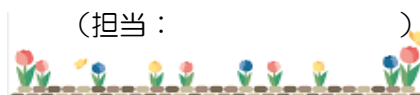




新緑がまぶしく、風が気持ち良い季節となりました。入学・進級から一か月。少しずつ新たなクラスや中学校生活に慣れてきたころでしょうか。五月は疲れが出やすい時期でもあります。そんな時こそ図書館で本を読んでみませんか。さて、今月号のテーマは「春」です。図書館の中には春に関する本がたくさんあります。ぜひお気に入りの本を見つけて読書ライフを楽しんでみてください！



(担当：)



令和8年度前期図書委員を紹介します



学年クラス	氏名	学年クラス	氏名	学年クラス	氏名
3-A		2-A		1-A	
3-A		2-A		1-A	
3-B		2-B		1-B	
3-B		2-B		1-B	
3-C		2-C		1-C	
3-C		2-C		1-C	

委員長：.....副委員長：.....書記：.....書記：.....

私と読書 先生

私には5歳になる息子がいます。毎日私に「絵本を読んで！」と楽しそうに本を持ってきます。私は疑問に思い息子に「絵本のなにが楽しいの？」と聞いてみました。息子は「新しいことを知ることができる」「次にどんなことが起きるのか考えるのが楽しい」と答えました。

そう答えた息子と一緒に読んだ本で皆さんにもぜひ、知って考えてほしい絵本があるので紹介します。「いのちをいただく」という絵本です。息子に読もうと思ったきっかけは息子の「なぜ、いただきますを言うの？」という疑問からでした。

本のあらすじを紹介します。食肉センターに勤めて命を「解く」、食べるために牛や豚を殺す職業をしている坂本さんの実話を基にしたお話が描かれた絵本です。坂本さんの生き物を殺す仕事を続けるべきかどうかの葛藤や、息子さんとのやり取りなど…大人でも読み終えると多くを考えさせられる絵本です。

この絵本を読んでから息子は「なぜ、いただきますを言うの？」という質問をすることはなくなりました。本を読むのが苦手な私のような人でも絵本なので昼休みの時間にも読むことができます。

ぜひ、読んでみてください。

(担当：)



「いのちをいただく」
近日入荷予定

図書委員オススメの本

《 テーマ 春 》



「青春ノ帝国」
石川広千花 913 い

『青春ノ帝国』 石川広千花著 913 い

皆さんは、「青春」と聞くと、どんなイメージをもちますか？
この本は、坂の上の古ぼけた一軒家にある、「科学と実験の塾」の塾長である久和先生、助手の百瀬さん、同級生の奈良君と佐紀の四人で物語が進みます。
この本を最後まで読むと、青春のイメージが少し変わるかもしれません。
ぜひこの本を読んで、新しい青春を体験してみてください。

(担当：)

『サクラ・タイムトラベル』 加部鈴子著 913 か

ひょんなことから、江戸時代の町にタイムスリップしてしまった志保と龍之介。そこでなんとあの将軍を救う特命をうけてしまっ…？

この本の中には、タイトルにもある通り、物語の象徴として桜が描かれます。タイムスリップ先での人々との新たな出会い、そして別れ、初恋…。全てが春の情景を想起させます。当時の文化にも触れることができるこの一冊を手にとって、是非あなたも春を感じてみてください。

(担当：)



「サクラ・タイムトラベル」
加部鈴子 913 か



「卒業するわたしたち」
加藤千絵 913 か

『卒業するわたしたち』 加藤千絵著 913 か

この本は、「卒業」をテーマにした、全13話からなる短編集です。たいていの場合、卒業と聞くと、学校の卒業式を想像すると思います。しかし、この本は、学校の卒業だけでなく、娘からの卒業、アイドルグループのメンバーが卒業など、様々な場面における「別れ」が描かれています。そんな中、結局私が一番感動したのは、学校を卒業する話です。卒業式を終えての先生の話を書く、主人公の心情が緻密に書かれていることや、私たちに最も身近な別れの話なのもあり、すごく感情移入しました。この短編集を読むと、別れがあるから、出会いもあるという意識がより高まります。ぜひ、自分に身近な話だけでもいいので、読んでみて、新しい発見につなげてみてください。

(担当：)

私と読書 先生

中学生の頃の私は、実はあまり読書が得意ではありませんでした。本を読むより、部活や友達と過ごす時間の方が楽しくて、図書室にもほとんど足を運んでいませんでした。でも、大人になってから思いがけず心に残る本に出会い、「読書ってこんなに面白いんだ」と感じるようになりました。特に印象に残っているのが、伊坂幸太郎さんの『重力ピエロ』と湊かなえさんの『母性』です。

『重力ピエロ』は、家族のつながりや過去の出来事と向き合う登場人物たちが魅力的で、読みながら何度も胸が熱くなりました。軽やかな文章の中にユーモアがあってテンポも軽快で、ところが読み終わると深い余韻が残り、「人はどうやって自分の人生を受け止めていくのだろう」と考えさせられました。一方、『母性』は、母と娘の関係をめぐる気持ちの揺れが丁寧に描かれていて、読み進めるほどに視点が変わり、同じ出来事でも見方によってこんなに違うのかと驚かされました。そして私の実母との関係もどこか似たような部分があるような(?)そんな気持ちにもなって興味深かったのを覚えています。中学生の頃の私は、本の世界の面白さにまだ気づけていませんでしたが、今になって思うのは、「本との出会いはいつでも遅くない」ということです。自分の心に響く一冊に出会えた時、その本が新しい考え方や気持ちをそっと広げてくれます。みなさんにも、そんな一冊が見つかるといいなと思っています。

(担当：)



「重力ピエロ」
近日入荷予定



「母性」
近日入荷予定